

2

## インド仏教と霊魂

鈴木 隆泰

山口県立大学教授  
日蓮宗現代宗教研究所嘱託  
東京都善應院住職

おはようございます。鈴木隆泰でございます。本日は「インド仏教と靈魂」というタイトルでお話をさせていただきます。有名な「毒矢の譬え」というものがあります。

## 1. 「毒矢の譬え」

パーリ聖典の『小マールンキャ経Cūḷamāluṅkyasuttanta』、『中部経典Majjhima-Nikāya (i. 426.8-432.5)』に収められているものです。マールンキャプッタという釈尊のお弟子さんがいらっしゃいまして、十個の疑問・悩みを抱えておりました。

### 比丘マールンキャプッタの悩み

「世界は永遠か (sassato loko)」「世界は永遠でないか (asassato loko)」「世界は有限か (antavā loko)」「世界は無限か (anantavā loko)」、そしてこれが本日のテーマとなる靈魂の問題となりますが、「いのち (靈魂) と肉体は同一か (taṃ jīvaṃ taṃ sarīraṃ)」「いのち (靈魂) と肉体は別異か (aññaṃ jīvaṃ aññaṃ sarīraṃ)」「如来は死後存在するか (hoti tathāgato param-maraṇā)」「如来は死後存在しないか (na hoti tathāgato param-maraṇā)」「如来は死後存在しながらしかも存在しないか (hoti ca na ca hoti tathāgato param-maraṇā)」「如来は死後存在するのでもなく存在しないのでもないのか (n'eva hoti na na hoti tathāgato param-maraṇā)」。後半の四つは死後世界と関係する疑問です。そして比丘マールンキャプッタはこのように思っています。

〔比丘マールンキャプッタ〕「これら十個の疑問に世尊が答えてくれれば、自分は清らかな修行 (梵行 brahmacarya。不淫に基づく出家修行＝一切の性的行為を断つ修行) を続けよう。もし答えてくれないのであれば、自分は還俗してしまおう。」と考えると、彼は釈尊のもとに赴くわけです。すると、釈尊は答える代わりに次のように説きました。

〔釈尊〕「マールンキャプッタよ、もし“世尊がこれらの疑問に答えてくれないのであれば、自分は清らかな修行を実践しない”という者があれば、その者は答えを得る前に死んでしまうであろう。」と言って、有名な毒矢の譬えを説くわけです。途中でちょっと飽き飽きしてくるほどウザたいのですが、そのウザたい感じを味わっていただくためにも、飛ばさずに読んでみます。

「ある男が毒矢で射られた。彼の友人や同僚や親戚の者たちは、彼を医師に手当てさせようとした。ところが射られた当の本人は、

“私を射た者〔のヴァルナ（四姓）〕はクシャトリヤ（王族、武人）階級か、バラモン（司祭）階級か、ヴァイシャ（庶民）階級か、シュードラ（隷民）階級か”

“私を射た者の名は何か、姓は何か”

“私を射た者は背が高いか、背が低いか、それとも中くらいか”

“私を射た者の肌色は黒か、褐色か、金色か”

“私を射た者はどの村、どの町、どの都市に住んでいるのか”

“私を射た弓は普通の弓か、それとも石弓か”

“私を射た弓の弦の素材はアッカ草か、サンタ草か、動物の腱か、マルヴァー麻か、キーラパンニン草か”

“私を射た矢の矢柄の素材はカッチャ草か、それともローピマ草か”

“私を射た矢の矢柄につけられた羽は鷺の羽か、アオサギの羽か、鷹の羽か、孔雀の羽か、シティハラヌ鳥の羽か”

“私を射た矢の矢柄に巻いてある腱は牛のものか、水牛のものか、鹿のものか、猿のものか”

“私を射た矢は普通の矢か、クラッパか、ヴェーカンダか、ナーラーチャか、ヴァッチャダントカ、カラヴィーラパッタか”

これらがすべて判明しないうちは、自分はこの矢を抜かない、と言ったとしたら、〔毒矢であるから〕その男はその答えを得る前に死んでしまうであろう。マールンキヤープッタよ、そなたも全く同様である。（中略）

この「マールンキヤープッタよ」という呼び掛け（vocative, 呼格）のことが頻発しておりまして、これが後に効いてまいります。

「マールンキヤープッタよ、“靈魂と肉体は同一である”という見解（*dr̥ṣṭi*）があるならば、清らかな修行を实践しよう、というのは正しくない。“靈魂と肉体は別異である”という見解があるならば、清らかな修行を实践しよう、というのも正しくない。“靈魂と肉体は同一である”という見解があろうが、“靈魂と肉体は別異である”という見解があろうが、いずれにせよ生・老・〔病・〕死等〔の苦〕があり、私は現世においてそれらを制圧せよと教示する。（中略）

それゆえマールンキヤープッタよ、私が説かなかったことは〈説かなかったこと〉として受け止めなさい。私が説いたことは〈説いたこと〉として受け止めなさい

い。

ではマールンキヤープッタよ、私が説けなかったことは何か。マールンキヤープッタよ、“靈魂と肉体は同一である”と私は説けなかった。“靈魂と肉体は別異である”とも私は説けなかった。(中略)

マールンキヤープッタよ、なぜ私はこれらのことを説けなかったのか。マールンキヤープッタよ、それは、目的に合わず、清らかな修行の緒とならず、〔苦からの〕厭離、貪欲を離れること、〔無明の〕制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃(ニルヴァーナ nirvāṇa)へと通じないからである。

ではマールンキヤープッタよ、私が説いたことは何か。マールンキヤープッタよ、“これが苦である(苦諦)”と私は説いた。“これが苦の原因である(集諦)”と私は説いた。“これが苦の制圧である(滅諦)”と私は説いた。“これが苦の制圧へと至る道である(道諦)”と私は説いた(四聖諦 catur-ārya-satya 〈高貴な者たちにとっての四つの真実〉)。

マールンキヤープッタよ、なぜ私はこれらのことを説いたのか。マールンキヤープッタよ、それは、目的に適い、清らかな修行の緒となり、〔苦からの〕厭離、貪欲を離れること、〔無明の〕制圧、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通じるからである。

それゆえマールンキヤープッタよ、私が説けなかったことは〈説けなかったこと〉として受け止めなさい。私が説いたことは〈説いたこと〉として受け止めなさい。]

このように世尊に説かれて、比丘マールンキヤープッタは納得し、世尊の教えに歓喜した。

これが「毒矢の譬え」です。これを見るかぎり仏教は、役に立つことだけをやればよいのだという、非常に実利主義的なもののようにも受け止められます。靈魂や死後の世界を考えることは、覚ることには無益なのだと、実際にそのように語る方もいらっしゃるし、そういうことを語る本をお出しの方もいらっしゃいます。一方、私たち日本の僧侶は葬祭儀礼に携わるわけですから、そういう主張をする人たちから「おまえたちがやっていることは無益なことなのだ」と云わんばかりのことを言われてきて、ある意味、私たち日本の僧侶を萎縮させてきたのです。しかし本当にそうなのかというのが本日のテーマになってきます。ところでこのように言うと、「いや仏教は無我を説くではないか、諸法無我は三法印、四法印にあるでは

ないか」と反論されることになるわけです。そこで「諸法無我説」というのは実際に原典ではどのように説かれているのか辿ってみたいと思います。

## 2. 「無我説」は靈魂の否定か

初転法輪における「諸法無我説」、『律蔵 *Vinaya-piṭaka* (i. 13.18-14.26)』の教説を見てみます。最初に弟子となった阿若憍陳如をはじめとする五比丘に対して、釈尊が説法している個所です。

〔釈尊〕「比丘たちよ、身体（物質、色。rūpa）はアートマン（ātman。自己の本体、靈魂）ならざるもの（非我）である。」

「身体はアートマンではない」、「身体は非我である」と説かれているのです。「アートマンがない（無我）」とは説かれていないことに留意してください。

〔釈尊〕「もし身体がアートマンであるならば、身体は病に罹ることはないはずである。また、“私の身体はこのようであれ”とか“私の身体はこのようでないように”ともなしうるであろう。しかし身体はアートマンではないから、身体は病に罹るし、“私の身体はこのようであれ”とも“私の身体はこのようでないように”ともなしえないのである。」

感受作用（受。vedanā）はアートマンならざるもの（非我）である。（中略）

表象作用（想。saṃjñā）はアートマンならざるもの（非我）である。（中略）

形成作用（行。saṃskāra）はアートマンならざるもの（非我）である。（中略）

認識作用（識。vijñāna）はアートマンならざるもの（非我）である。（中略）」

つまり「諸法無我」としてこの場面で説かれていたのは、実は「五蘊非我」のことだったのですね。

〔釈尊〕「比丘たちよ、汝らはどう考えるか。身体は常住であろうか、それとも無常であろうか。」

〔比丘たち〕「身体は無常であります。」

〔釈尊〕「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」

〔比丘たち〕「思い通りになりません。」

〔釈尊〕「では、無常であって思い通りにならず、損壊する性質を持つ〔身体〕を、どうして“これはわたしのものである”とか“これがわたしである”とか“これがわたしのアートマンである”などに見なすことができようか。」

〔比丘たち〕「いいえ、できません。」

〔釈尊〕「感受作用は（中略）、表象作用は（中略）、形成作用は（中略）、認識作用は常住であろうか、それとも無常であろうか。」

〔比丘たち〕「無常であります。」

〔釈尊〕「では、無常であるものは思い通りにならないか、それとも思い通りになるか。」

〔比丘たち〕「思い通りになりません。」

〔釈尊〕「では、無常であって思い通りにならず、損壊する性質を持つものを、どうして“これはわたしのものである”とか“これがわたしである”とか“これがわたしのアートマンである”などに見なすことができようか。」

〔比丘たち〕「いいえ、できません。」

〔釈尊〕「それゆえに、ありとあらゆる身体、感受作用、表象作用、形成作用、認識作用は（中略）“これはわたしのものではない”“これはわたしではない”“これはわたしのアートマンではない（非我）”と、如実に、正しい智慧をもって理解しなくてはならない。」

これが最初の説法、初転法輪で説かれた、いわゆる「諸法無我説」ですが、実際には「五蘊はアートマンではない」という説だったのです。正確には「諸法無我」ではなく「五蘊非我」だったわけなのです。すなわち、アートマンの存在否定ではありません。五蘊がアートマンではないと釈尊は説かれているだけであって、五蘊以外にアートマンが存在する可能性を残しています。ただし、現存するパーリ仏典ではアートマンが存在すると明言していないのも事実です。では仏教においてアートマンを説く者たちはいなかったのか、というと実はいたのですね。

### 3. 靈魂を説いた部派が存在していた

釈尊の入滅後およそ100年ぐら経ったアショーカ王の治世以降に、仏教教団が大きく分かれていってできあがったのが部派です。宗派とは異なり、部派仏教と呼びます。

犢子部 (Vātsīputrīya) という部派が「プドガラ (pudgala 靈魂、アートマン)」の存在を主張していたことがわかっています。この犢子部という部派はかつて相当の影響力を持っていましたが、現在ではあまり知られていません。皆さんの中にも犢子部と聞いて初耳だという方もいらっしゃると思います。

犢子部は、プドガラは過去・現在・未来の三世にわたる業の担い手である輪廻主体として、有為法（作られたもの）でも無為法（作られていないもの）でもないものとして実在していると主張しました。一方、西北インドにおいて有力だった説一切有部（Sarvāstivādin）の教学によれば、一切法は有為法と無為法しかないのです。そして一切法は、有為法と無為法よりなる「五位七十五法」に分類され、その中にプドガラ（アートマン）は存在していません。この説一切有部の教学は、龍樹（Nāgārjuna、150-250頃）と並ぶインド大乘仏教の大論師である世親（Vasubandhu、400-480頃）の著作『俱舍論（Abhidharmakośabhāṣya）』に詳しく紹介されています。『俱舍論』は仏教の基礎学とされ、古来、仏教を学ぶ者は必ず通らなくてはならない関門です。その教え、すなわち「一切法は有為法もしくは無為法のみ」という理解に立つとき、その範疇に含まれないプドガラが認められる余地はありません。

また、南アジア・東南アジアに広まった南伝上座仏教の大寺（Mahāvihāra）派も、犢子部のプドガラ実在説を異端の説として強く批判しました。

仏教の伝播は北伝（漢訳仏教圏）、南伝（パーリ語仏教圏）、チベット（チベット語仏教圏）に大別されます。これら三系統のいずれにおいても「無」の潮流が主流になって「有」の潮流が批判的に扱われたため、「有」、何か実在すると説くことが異端であるかのような風潮ができてしまったのです。しかし、この風潮は仏教において元からあったものでありません。仏教には元々「無」の潮流と、「有」の潮流の両者があったのです。それがあつた時から「有」の潮流が弱くなって「無」の潮流が優勢になっていった。そのために、実在を説くと異端のように思われてしまっているわけです。

## 4. 日本人の他界観

ここで、インドをいったん離れて日本人の他界観を見てみようと思います。

日本人は死後の世界に並々ならぬ関心（畏れ）を抱いてきました。これは『古事記』を見てもわかります。伊邪那岐は亡くなった伊邪那美を求めて黄泉の国に行くわけですね。死者と会いたいのです。ところが死者の魂には死に起因する穢れ「死穢」が付着しているので、死者となっている伊邪那美は伊邪那岐に襲いかかってきます。現代でも会葬御礼に「お清めの塩」が付いているのも、この「死穢」を取り除くという信仰から来ているはずで、死者はきちんと浄化しないと、悪霊（祟り



神) になってしまうわけです。また死者の魂には生前の個性が反映されます。怨みをもって死んだ人の魂は、特に悪霊になりやすい。例えば崇徳上皇1119-1164 (日本一の大魔王) は天皇でありましたが、無理矢理退位させられて上皇にさせられました。そこで、復権したいと願ひ保元の乱というクーデターを起こして失敗し、讃岐の白峯に流された後、その地で怨み死にする。その際、天皇家に呪いをかけました。崇徳上皇は、「これからは天皇家は没落するのだ」、と。実際にその後は武家の世の中が到来して、政治権力は幕府等の武家勢力に持っていかれるわけです。日本の朝廷が力を失ったのは崇徳上皇の呪いのせいだと、明治になるまで信じられていたということです。また菅原道真公845-903も勢力争いに敗れて讒訴されて、太宰府に流されてそこで怨み死にし、朝廷に様々な仇をなしました。このような崇り神というものが日本には沢山いるわけです。平将門なんかもそうですよね。あとはアニメや漫画でも、『もののけ姫』には「ナゴ」という崇り神が出てきますし、『BLEACH』という作品には「虚 (ホロウ)」という崇り神が出てきます。このように、現代の日本にも崇り神という信仰は根付いているのですね。ところで、そういう崇り神を含めた死者の魂は放っておくと崇り神・悪霊になってしまうわけなのですが、きちんと祀れば、浄化されて祖先神 (ご先祖さま) となり、子孫を守護する。崇り神でも、浄化されれば善神になる。崇徳上皇も白峯神宮に祀られて神になっていますし、菅原道真公は日本各地の天満宮に祀られて天神様になりました。

## 5. 「仏説」とはなにか

「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説である。(yam kiñci subhāsitaṃ/ sabban taṃ tassa bhagavato vacanaṃ arahato sammāsambuddhassa/))」(『増支部経典、*Aṅguttara-Nikāya* (iv. 164.7-9))

「善く説かれたもの」とは人々を救う教えのことです。何であれそれが一人でも救えるのであれば、それをもって釈尊の直説とする、誰が説こうともです。これが仏教という宗教の根本的特性なのです。

ブッダのことば、釈尊のことば、釈尊の直説・仏説とはオールマイティーな神の声ではありません。例えば、キリスト教の『新約聖書』「ヨハネによる福音書」はこう始まるわけです。「初めに言 (ことば) があった。言は神と共にあった。言は神であった」、つまり神の声は神そのものとして絶対の権威を持つのです。オールマイティーなのです。神がオールマイティーであるように神の声である聖典もオ



ールマイティーで万人に通用する、だから“この『聖書』に従え”という命令型の宗教が生まれるわけです。

ところが仏教における教えというものは、命令型ではありません。時・処・人・苦悩・願いの違いに応じて、個々別々に処方された治療薬です。「毒矢の譬え」は、マールンキヤープッタに対する治療薬なのです。彼は“世界の謎全てが解決しない限り修行しない”と宣言したに等しいのです。たとえ釈尊が彼の疑問十個全てに答えたとしても、マールンキヤープッタはさらに「ではこれはどうでしょうか？」と別の疑問を次々と呈するであろうことを釈尊は見抜かれていたのだと思います。だからこそ、「マールンキヤープッタには、わたしが説いたことが全てであり、それ以上は問うな、と受け止めさせよう」という配慮をなされたわけです。

先の「毒矢の譬え」における「マールンキヤープッタよ」という呼びかけの多用、まさに“この教えはマールンキヤープッタに向けたもの”と明言されていたのですね。ですからマールンキヤープッタ的ではない別のタイプの人には別の教えが存在するのです。「毒矢の譬え」はあくまでもマールンキヤープッタに対する教えであって、この教えをもって全仏教徒に適用するというのは、まさに仏説をオールマイティーな神の声と見誤ってしまっているということになります。

## 日本人の願い

日本では亡くなった方を神（祖先神、ご先祖さま）・仏（仏さま）として畏怖し、敬い、お祀りしてきた伝統があります。日本では普通でないものは全て神になります。本居宣長の『古事記伝』に記されている通りです。いろいろな神がいるわけです。善い神もいれば悪い神もいます。

繰り返します。「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説」なのです。「方便 (upāya)」とは「救済手段」という意味です。ブッダが我々を救済するために手を差し伸べてくださること、その差し伸べられた手のことを「方便」といいます。「方便」と「真実」という二元的捉え方は適切ではありません。我々に下された救済の力が方便です。それゆえに「方便品」というのが大変大事なチャプターになっているのです。「方便の力」に基づいて生み出された、人々を救い、安寧に向かわせる教えであれば、それを「釈尊の直説」と見なすのが仏教の根本的特性なのです。

日本人が仏教に最も強く望んだのは、仏教の力をもって除災招福を実現するとと

もに、死者の魂を浄化し、祖先神を強化することです。神道では明治になるまで死者の魂を浄化できなかったのです。明治期以降は神仏分離が行われて、神道でも葬祭を執行するようになりましたが、江戸期までは庶民の葬祭儀礼というのは仏教の独壇場だったのです。仏教パワーのみが死者の魂を浄化できると信じられていたからです。

日本における葬式仏教は、日本人の心を安んじるために、方便の力が発揮されて形づくられた「釈尊の直説」に他なりません。日本人は、亡くなった方が仏教の力をもって死穢が浄化され、清浄なご先祖さま・仏さまとなることを願った、そしてご先祖さま・仏さまからの守護・加護を希った、これが日本人のエートス（気風 ethos）なのです

ですから、“世界の謎全てが解決しないと安心できない”という「マールンキヤープッタ的人間」ではなく、“魂・永遠の命があると安心できる”や“死後の世界があると安心できる”という方には、靈魂の实在や死後の世界を堂々と説いたらよいのです。そして、それらは全て仏説です。「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説」だからです。仏教は「教義を固定化しない柔軟さ」と「柔軟であるがゆえの強靱さ」を兼ね備えている宗教なのです。

## 6. 〈中道〉とはなにか

初転法輪における最初の説法が〈中道〉（『律蔵 *Vinaya-piṭaka*』 i. 10.10-25）でした。釈尊が説きます。

比丘たちよ、出家修行者は二つの極端（二辺 *anta*）を行ってはならない。（中略）

比丘たちよ、如来は二辺に近づくことなく、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へと通ずる〈中道 *madhyamā pratipad*〉を、目の当たりに覚ったのである。

比丘たちよ、如来が目の当たりに覚ったところの、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃へ通ずる〈中道〉とは何かと言えば、それは八正道である。すなわち、

- 一、正見（正しい教え *saddharma* に基づく正しい見解）
- 二、正思（正しい見解に基づく正しい意業）
- 三、正語（正しい意業に基づく正しい口業）

四、正業（正しい意業に基づく正しい身業）

五、正命（正しい三業に基づく正しい生活）

六、正精進（正しい生活に基づく正しい努力）

仏教では三業を整えることが正しい生活であって、正しい生活ができない人には正しい努力はできないと教えられているわけです。

七、正念（正しい努力としての正しい注意力 = Right Mindfulness）

八、正定（正しく注意力を払い正しく〈自分〉を定める）

である。比丘たちよ、これが、如来が目当たりに覚ったところの、〔仏〕眼を生じさせ、〔仏〕智を生じさせ、勝れた智である全き覚り、寂滅の境地である涅槃に通ずる〈中道〉なのである。

右と左がある時に真ん中を通るのが〈中道〉なのではありません。それは〈中庸〉です。絶対にこれしかないのだ、と拘らずに、その人に合った、そしてその人を覚り・涅槃に導く道であれば、それが何であれ〈中道〉になるわけです。「正しい」と言いながら具体的に何が正しいかというのを教示していない、明示していないという点がとても重要です。これがイスラームであれば、「豚を食べるな」とか「酒を飲むな」とか「一日五回礼拝しろ」などと決まっています。全ムスリムに共通する義務があるのです。ところが仏教では〈八正道=中道〉の説明の中で、何が正しいかを具体的に説いておらず、ただ、釈尊は〈中道〉を実践して覚り・涅槃を得たのだと仰っているわけです。ということは人を覚り・涅槃に向かわせる、相手を覚り・涅槃へと導く道は全て正しい道、八正道で〈中道〉になるわけです。相手を覚り・涅槃へと導く道が正しい道、善く説かれたもの、善説 (subhāṣita) であれば、それは全て仏説ということになるのです。

## 7. 靈魂はあるのか

いよいよ本題になります。有無の二辺を離れるという点に関して、初期仏典の『相應部經典』(Saṃyutta-Nikāya 44・10) に次のような教えがあります。

“アートマンが存在する”と断定すると「常見（慢心の原因の一種）」に陥るし、“アートマンが存在しない”と断定すると「断見（虚無主義の一種）」に陥る（取意）。

すなわち、アートマンが存在しないと断定してはいけないと釈尊は明言されているわけです。そして龍樹菩薩は主著『中論頌』(Madhyamakakārikā 18・6) に

おいて、

「諸仏によって“アートマンは存在する”と暫定的に（治療薬として）説かれた。“アートマンは存在しない”とも〔治療薬として〕説かれた。」

と仰り、治療薬としての有我、無我があるのだと高らかに述べられています。龍樹菩薩が説かれているのですよ、これ。「無」の潮流の代表格といわれている中観派の祖、その龍樹菩薩がこのように説かれていたわけです。つまり仏教徒全員に通用する真実（四法印や中道など）と同レベルで、種々の対象を“ある”“ない”と断定することは、治療薬の固定となり、中道に反する二辺（極端）となるのです。

したがって、霊魂があることを、仏教徒（インド、南アジア、東南アジア、チベット、中国、朝鮮半島、日本、その他）全員に通用する真実としても極端になり、霊魂がないことを仏教徒全員に通用する真実としても極端になります。一方、個別の治療薬においては、霊魂（アートマン）も認められていたのです。

アートマンの实在を説く經典の代表には、これからお示しする『大乘涅槃經』や『勝鬘經』などがあります。そこでは仏性 (buddhadhātu)・如来蔵 (tathāgatagarbha)、これがアートマン (ātman) と同一視されています。日本仏教は、天台教学の流れもありますし、くわえて密教の影響も手伝って、仏性説が基本のひとつとなっています。そして『楞伽經』は仏性と阿頼耶識 (ālaya-vijñāna, 業の担い手) を同一視しました。「アートマン＝仏性＝阿頼耶識＝輪廻主体 (いのち)＝霊魂」という図式が大乘仏教ではできあがっているのです。このように言うと、「初期仏典 (原始仏典) は仏説であるが、大乘仏典は釈尊滅後にできた非仏説だろう」と誤解している方がいまだにあります。非大乘、大乘を問わず、仏教における教説は全て個々別々の治療薬です。「何であれ善く説かれたものであれば、それは全て釈尊の直説」と見なす、それが仏教という宗教の特性です。ほとんど全ての經典は個々別々の治療薬です。ただし『法華經』を除きます。『全国布教師会連合会会報』27 (2015) をご覧になって頂きたいと思います。その中で、『法華經』というものは個々別々の治療薬ではなく、仏教全体とイコールなのだという議論をさせていただきました。

戻ります。『涅槃經 Mahāparinirvāṇa-mahāsūtra』 (MPNMS 105b4-106a5) です。

〔迦葉菩薩〕「果たしてこの輪廻する世界に、アートマンはあるのでしょうか。それともないのでしょうか。」

〔釈尊〕「アートマンとは仏性のことである。仏性は一切衆生に存在する（一切衆生悉有仏性 \*asti buddhadhātuḥ sarvasattveṣu）が、それは諸々の煩惱に覆われていて、自分の中に存在しているにもかかわらず、衆生はそれを見ることができないのである。例えばある村の貧しい者の家に、無尽蔵の金の鉱脈があったとしよう。そこには一人の婦人が住んでいたが、自分の家の地下に金の鉱脈があるとは知らず、貧しい生活を送っていた。そこで、人を導く術に長けたある人が婦人に、“婦人よ、こちらに来なさい。私はあなたに報酬を与えるから、家事をやっておくれ”と言うと、彼女は“もしあなたが私の息子に宝を示してくれるなら、私は参りましょう”と応えたところ、（中略）彼は“おまえの家には金の鉱脈があるにもかかわらず、おまえは知らないのだ（中略）”と言って、（中略）そこで彼は家の地下から金の鉱脈を取り出して彼女に与えたのである。彼女はそれを見て驚嘆し、彼に帰依した。

それと同様に善男子よ、仏性（＝アートマン）は一切衆生に存在するのだが、ただ見ることができないだけなのである。貧しい女〔の家の地下〕に金の鉱脈が存在していたように。〕

次です。『大法鼓経 *Mahābherīsūtra*』は、『大正新脩大蔵経』では「法華部」に属しています。その理由は、『法華経』から「化城宝処喩」や「長者窮子喩」を含めた様々な譬喩を引っ張ってきて一乗説を説いているからです。同時に、その一乗説と如来蔵・仏性説を結びつけたのも『大法鼓経』です。

『大法鼓経』 (*MBhS* 95a5-6)

この『大法鼓経』もそれと同様〔に希有〕である。それはなぜかといえば、如来は入滅したにもかかわらず“依然として〔ここに〕住し続ける”と言い、アートマンも我がものという觀念（我所）もない〔と信じてきた〕者たちに向かって、今再び“アートマンはある”と説くからである。

『大法鼓経』 (*MBhS* 115a8-b1)

一切衆生・一切生類に仏性があるって、無量の妙なる相好によって荘嚴され光り輝いており、これを因として諸々の衆生は涅槃を得るのである。

『楞伽経 *Laṅkāvatāra-sūtra*』 (*LAS* 220.13-14)

仏性は無始爾来、種々の煩惱にまわりつかれているので、アーラヤ識（阿頼耶識）と呼ばれる。

次の『宝性論（究竟一乗宝性論）*Ratnagotravibhāga-mahāyānottaratantraśāstra*』、これは如来蔵・仏性を体系的に説いたインドの論書で、如来蔵・仏性説を学ぶには最重要の典籍とされています。

『宝性論』（RGV 73.9-16）

仏性は（中略）思惟するものでも、分別するものでもなく、ただひたすら信解すべきものである。

『宝性論』（RGV 74.1）

信によらなければ、諸仏の最勝の道理〔である仏性〕に通達することはできない。

『宝性論』（RGV 115.3-4）

仏性（中略）は諸仏の境界であって、たとえ清浄な衆生であっても思議することは不可能である。

『勝鬘経 *Śrīmālādevīsīṃhanādasūtra*』（ŚMS 281-282）

〔勝鬘夫人〕「世尊よ、本性清浄な仏性が、客塵煩惱によって汚されていることは、諸仏の境界であって、思議することはできないものと私は思います。」（中略）

〔釈尊〕「勝鬘夫人よ、まさにその通りである。（中略）ただ諸仏を信じるほかはないのである。」

このように個別の治療薬としては、ここでお示したように、アートマン（靈魂）は仏教で認められていたのです。それが確認できました。

## 8. ログス（理性 *logos*）とパトス（篤い信仰心 *pathos*）とエートス（気風 *ethos*）

宗門の大学も含めて、大学教育はログスに基づいて行われます。一方、僧侶の布教や修行はパトスに基づきます。ところが日本の仏教というものは、日本人のエー



トスや状況に応じることによって今日まで発展し存続してきました。ロゴスを前面に出したら失敗する、つまり説教くさいお話になってしまい、「お坊さん、何言ってんだかわかんないよ」ということになるわけです。しかし私見ながら、ロゴスを前面に出したら失敗するということよりも、前面に出せないロゴスしかないという点がむしろ問題なのではないかと思うわけです。また、パトスを前面に出してもうまくいかない、お坊さんが熱くなって「さあ、皆さん修行しましょう、こんなにすごいですよ」と言ってもなかなかうまくいきません。なぜなら篤い信仰心＝パトスは、価値観・世界観を共有した者たちの間でしか通用しないからです。そこで私はエートスに注目すべきであろうと思っています。さらには時代や環境にも配慮し、それらに応じて教学（ロゴス）を再整備し、修行（パトス）を実践していく必要があるのではないかと考えます。実際、釈尊、お祖師様、先師の方々はそのようにされてきたわけです。本当に釈尊、お祖師様、先師の方々に慕うのであれば、その方々の模倣をしなければなりません。仏教徒とは釈尊に信順し、釈尊を規範となし、そして釈尊を模倣する人々の総称です。釈尊をお祖師様や先師の方々に読み換えても全く同じです。

ただし、模倣と申し上げても、まったく同じ行為をするというわけではありません。日本人のエートスを基本とし、時代や環境にも配慮し、それらに応じて教学（ロゴス）を再整備し、修行（パトス）を実践していきます。そのためのわずかな歩みなのですが、釈尊の遺言、そこから現代的メッセージを読み解くという課題を自らに課しまして論文を書きました。2006年のものです。また『葬式仏教正当論』という本も2013年に著しました。ひたすら私が願っているのは、釈尊—お祖師様—先師の方々を過去の聖人としてしまわないように、仏教そのものを過去の宗教としてしまわないように、ということです。まずは、私たち自身のロゴスとパトスとエートスを協調し一致させることです。場合によっては、私たち自身の中でロゴスとパトスとエートスがバラバラになってしまっていることもありうるわけで、まずは私たち自身が一致させたいと、自分に向けた戒めとして願っているのです。またそういうものの一環として、日蓮宗新聞社から『お題目で送るお葬式—「南無妙法蓮華経」のお葬式・その意味と功德—』（2018）という冊子を出ささせていただきました。

さらに、現代宗教研究所における葬儀プロジェクト報告書（『現代宗教研究』53、2019、pp. 314-327）を公表させていただきましたが、そこでは、



「日蓮聖人の他界観はインド伝来のそれとは異なり、日本人の他界観をほとんどそのまま反映している。その象徴として、死後に魂が赴く（往詣する）浄土がこの世にある霊山という山であるという点と、その際に往生という輪廻転生を経験しない点（鈴木 [2018]）、追善供養が可能な点などを挙げることができる。したがって本宗の場合、「日蓮宗としての葬祭仏教」を教義レベルで整備することが可能であると判断される。これは本宗の大きな強みとなるであろう。」

と述べさせていただきました。

是非、教学（ロゴス）レベルで整備することで皆さまと手を携えていければと念じております。ご清聴ありがとうございました。南無妙法蓮華経。